

～卒業生からの手紙～

先日、本校卒業生の村田勇樹さんから本校職員に手紙が届きました。その中に、「後輩たちに伝えてもらいたいことがあります」と書いてありましたので、以下に掲載いたします。村田さんは本校高等部から筑波技術大学情報システム専攻に進学され、都内の一般企業に就職いたしました。

「…先日、内定者面談があり、初めて企業の本社ビルに行って参りました。実は、コロナ禍ということもあり、インターンシップや採用試験、面接など、全てがオンラインを活用した形式で進んでおりました。そのため、一度も会社に伺うことなく、就職活動が終わりました。中学高校、そして、大学という十年間を「障害者の世界」で生きてきた私にとって、晴眼者である同期達と世間話をするのが、こんなにも難しく、エネルギーを必要とするものであるのかと驚きました。これから踏み出す社会では、視覚障害者は「少数派」です。頭ではしっかりと理解していたことが、実際に目の当たりにすると正直、不安は大きいです。ただ、周囲の助けを借りながら、私だからこそ貢献できることを少しずつ増やしていきたいと思います。

今も懸命に点字や歩行の訓練に励んでいる盲学校の後輩の皆さんに、伝えたいことがあります。

点字や歩行はとても大切な技術です。しかし、それと同じくらいスマホやパソコンの使い方を学ぶことも大切だと私は実感しています。なぜなら、盲学校の外では点字資料をもらえる機会がほとんどないからです。晴眼者と同じ資料を文字認識アプリやデータで確認できる能力も極めて重要です。

また、安全に歩行ができて移動する目的がなければ意味がありません。人と交流できる機会をもち、ルートを自分で検索できる力が大切です。そして、出先で災害が発生した時などでも、正しい情報を自分自身で集めることができる力が何より求められると思います。そのために、日頃からスマホやパソコンに触れる機会をたくさん作ってほしいのです。様々な支援技術については、専門の先生方もおられると思いますので、ぜひ実践してください。

正直言って、私は首都圏の盲学校を卒業した同期から全てを教わりました。卒業後に苦労をした経験から、後輩のみなさんには、点字や歩行だけでなく、さらに一歩踏み込んだ「時代に合った技術」を身につけてほしいと強く願っています。晴眼者との情報格差は深刻なものがあります。」



村田さんは本校高等部在学時にアビリンピック（全国障害者技能競技大会）パソコン操作部門で入賞した実績を持っています。情報のデジタル化が進む現在、これからは端末機器の操作等、学校の授業だけでなく自ら学んでいかなければ社会に対応していくことが難しい時代になってきました。本校でも、今年度から一人一台のタブレット PC が配付され、様々な場面での活用が始まっています。この機会にお子様を含め、御家族の中でデジタル社会を生き抜くために必要なことについて話をしてみたいはいかがでしょうか？